
★ストラトス

ストロンジウム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

★ストラトス

【Nコード】

N1795Y

【作者名】

ストロンジウム

【あらすじ】

ISの世界にソウリイターのブラックスターが転校…そういう話です。

受験生でもあるので更新はお世辞にも早いとはいえませんぜっ!!

【第零話】（前書き）

これは二次創作です。

模試そういうのが嫌いならば即回れ右を……

【第零話】

「うーん、どうしたもんかねえ」

ここは、デスシティーの鏡でつながった世界、そこで一人悩んでいた。

「ほんと、困ったなあ」

その人は、顔をデフォルメしたガイコツの面で覆い全身を真っ黒に染める黒いマントを頭からすっぽりとかぶっていた。

（ああ、最近デスサイズスの数が減って来ちゃってるせいで梓ちゃんをフルで活用してる状態だし、すこし休ませてあげたいなあ）。
本人は大丈夫って言ってたけど絶対無理してるしなあ）

頭の中では、『かまいません、大丈夫です』といって眼鏡を上げている梓が浮かぶ。

「ひゃっは☆ ダンナ！！ 元気か！？」

俺はげんきだあ！！という風に、バン。と扉を元気いっぱいに開け放って少年が一人入ってきた。

私は、その少年がブラックスターと言う事を確認すると鏡から出てくるのだった。

「ちゃっすーういーす。 ブラックスターも元気してたー」

そう言いながら右手を高々と上げて挨拶とするのだった。

「ダンナ、ちょっと俺すこし頼みがあるんだけどな、良いか？」

珍しい事にいつも自分の意志を曲げないブラックスターがそんな風に尋ねてきた。

やっぱり成長したんだなー。と思った。そー言えばわが息子は、一体今何をしてるんだらうか？

「んー？ どったのブラックスター」

それにしてもさっきの件どうしようかなー。んー、困ったね。

「ダンナ、突然だが俺に休みをくれー！！」

なんだそんな事か……。

この前みたいに『ダンナの称号をくれー！！』なんて言って来たらどうしようかと思ったよ。

「いいよー。 良いよー、もうぜんぜんオーケー、オーケー」

私は、手でピース型を作った。

「そうか、サンキューなダンナ!!　ちなみに今回も、また椿の実家に言ってくるぜ!!」

じゃあなくダンナ。と言ってブラックスターは歩いていくのだった。

「……………」

ん? 椿ちゃんの実家!?　えっと、確か日本だったよね……。

「おい、ちょっとまってーぶらつくスター」

「何だダンナ、なんか言い忘れか?」

ブラックスターは再びこちらに向かってくる。

「ちょっと、頼みがあるんだけど……」

私は、少しこの子で大丈夫かな?　なんて思ったのだが、今の状況は簡単に言えば猫の手でも借りたいくらいの状況だった。

まっ、椿ちゃんもどうこうして貰うから大丈夫だよね?

「……ん？」

「日本に行くついでに、日本の支部頼めちゃったりしちゃったり出来るかな？なんて」

恐る恐るブラックスターを見るとその瞳は案の定めんどくさそうにこちらを見ていた。

それは、それだけで、えー、いきたくないなー。と表しているようだった。

「それって、この前、マリーちゃんがやってた事だよな？」

嫌がっている。その感情がよく伝わった。

やっぱりこんな反応になったけど、こうなる事は想定内だよブラックスターー。

「まあ、いきたくないんなら別に良いよ」

「……それなら。」

また出て行こうとするブラックスターを見ながら私はえさを蒔くことにした。

「ああ〜でも残念だなあ〜。せっかくすつごい強い人しょうかいしようとおもったんだけどな〜」

これでブラックスターは喰い付いてくるはずだ。
私は、ちらりと見ると。

「マジか、ダンナ！！ 教えろ！！ いや、教えてくれ、たのむぜー！！！」

「え、マジで、言ってくれるの？ さっすがブラックスター 話が早くて助かるよ〜」

ほら喰いついた。

【第巻話】

「全員そろってますかねー？ ……んんん？ まあ、一人見当たりませんね。 まあ気にせずこのままSHRはじめますよー」

そう言っって黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田麻耶先生（さっき自己紹介していた）だった。

身長はやや低めで、生徒とほとんど変わらない。その上サイズがあってないのかだぼっとしているので、ますます小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめで、若干ずれている。

とまあ、一言で言うとなんと言うか、『子供が無理して大人の服を着ましたあー』みたいな感じだった。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますねー」

「……………」

けれど教室の中には変な緊張感が存在して、誰からも返事がなかった。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順でお願いしますねー」

ちよっとうろたえる山田先生がかわいそうなので、せめて俺ぐらいは反応しなければとおもうのだが、なんてこった！！ 今の自分にはそんな余裕などは存在しない。

なぜなのか？

答えは単純。俺以外は全員女子だからです。

上下左右、縦横無尽、女子に囲まれています。将棋で言ったら摘んだ。

しかし、この状況を見て（読んで）、

「うわぁいいなー」

とか、

「一夏死すべし。」

とか思ったやつ、いっぺん経験してみるがいい！！ 絶対トラウマもんだから！！ 女性恐怖症とかを余儀なくされるからっ！！

（だがまあしかし、これは……………想像以上にきついぜ……………）

しかも現在進行形で自意識過剰ではなくリアルに八十ほどの視線を感じる。いや今一人いないから七十八か。

その上席も最悪。場所は真ん中かつ最前席……………。最悪だ。

今の気持ちは、さながら、戦場の敵地にぽつんと一人取り残されてしまったかのような……………。全く今日日平和きょうじつでよかったよ。

そして俺は、ちらりと窓の方に目をやる。

だが、そこには、誰も座っていない。

当たり前だ何故ならそこは、ただ一人今この教室にいない誰かの席だったからである。

（うらやましいな……）

そんな事を思いながら眺めていると、その席の後ろに位置するところに座っていたスツごくポニーテールが長い、よく似合っている幼馴染の篠ノ之箒は、俺が自分を見つめていると思ったのか、顔を少し赤らめていた。

（……いやいや、お前見てないから）

そう心の中でつつこんで、俺は顔を前に戻した。

（お、そろそろ自己紹介の順番が回ってくるな……一体何を行ったらここにいる人たちはどんな事を言ったら満足してくれるのか……迷いどころだな）

そんなことを思いながら一人思考に入っただが。

「ひっやつはああ☆☆☆☆」

叫び声は俺の思考を貫きついでに先ほど見ていた席（空席）の窓ガラスを盛大に砕け散らせてそこから一人の少年が現れた。

「オウ オウ オウッ！！ 俺は、ブラック★スターだ！！ テメエら盛大に喜べっ！！ 神をも越える俺様がきてやったぞ」

ブラックスターと名乗った少年は、教室に入ったかと思うと目にもとまらぬ速さで教卓にのぼりそう叫びその上で胸をそらしていた。

「……………」

「は、はわわわわ、どどど、どなたですか貴方は!？」

我らが副担任こと山田麻耶先生は突然の来客者におどけながらそう尋ねた。

ちなみに最初のカッコはクラス全員の反応（山田先生は除く）ね。

一方今だ教卓の上から降りようとせず（一体どういった教育をされてるんだ!）自称『神をも超える俺様』ことブラックスターは、そのまま状態でつまり上から目線で答えた。

「俺様は、ブラックツツ★ツツスターだっ!!! ……まったく、俺様に二回も名乗らせるとは……。 ん？ お前まさか……………」

ブラックスターは、教卓でしゃがみこんでグイと言う風に山田先生の方に顔を近づける。

「な、なんですか!？」

それを山田先生は、負けじと顔を近づける。

（近すぎですよ先生!？）

俺は、すなおにそう思った（おそらくクラスの女子も）だがブラックスターはそんな事お構い無しで、

「もしかして、俺様が凄すぎて聞きそびれたのか!！」
と尋ねた。

「「「へ!?!」」」

山田先生、クラス全員（俺も込み）はあたりまえのように何のことか訳がわからず聞き返した、

「そうかそうか、やっぱり俺様は、最強だなっ。凄すぎて既に凄いがMAX越えてもう俺様、神越えてるんじゃない……」

只今クラスのほぼ全員が目が点になっているのだがそんな事は、やはりお構いなしなのかブラックスターは、うんうんと腕を組み首を上下に動かしながらさらによく分からない事を言いつづけていたのだが、急にそのマシンガンのような口を止めいつのまにか教室の入り口に視線を向けていた。

そしてそこには、タイトな黒スカートに黒のスーツといった格好に纏った織斑千冬（俺の姉。てか何で千冬姉がここにいるの!?! 確か最後に見たのニヶ月前ぐらいだよな!?!）が、額に何本も青筋を出して存在していた。

その上その目は核シエルターおも貫けるんじゃないだろうかと言うぐらいに細く鋭い眼力を発しブラックスターをにらみつけていた。

（純粹に怖いよ千冬姉……………）

「お、お前はっ！！」

ブラックスターは千冬姉に指を差してわなわなと言うように揺れていた。

ついで言うとなぜかその顔は青くなっていた。そして一言、

「出たな、魔王！！」

「だ・れ・が・魔王だ、誰が！！」

そう千冬姉が言ったかと思うと、パアンツと軽い音が鳴った。

音源は、やはり千冬姉の持っている主席簿からだった。

アレって音は軽いんだけど威力半端ないんだよな……………と言うか、いつの間に移動してたんだ千冬姉！！

今全く見えなかったんだけど！！

それから遅れて、ブラックスターは教卓から転げ落ちていた。

千冬姉の出席簿アタックからは避けられたようだったが（一体どうやって！？）その反動で頭から床に転げ落ちていたように見えてたんだが、多分その通りなんだろう……………てか、無事なのかブラックスター？

俺は、そんな風に心配していたんだが「いつてえなあー!!」
と言う自己主張の高い叫び声が聞こえた。

どうやら大丈夫らしい。

ブラックスターは、そのまま地面に倒れた状態でそこから背中だけの力を使って起き上がり（この後に聞いたんだがジャックナイフ機動と言うらしい）千冬姉に一喝。

「決闘だ!!」

「ほお、お前いい度胸だな、そんな態度は普通断る私だが。今の私はそういう態度は嫌いではない」

そして千冬姉は、その腕を組み二秒ほど考えて再びブラックスターに向き直り「解ったその勝負、受けてやる」と答えた。

俺は（おいおい、大丈夫か?）と、そんな声が漏れてしまいそうになった。

ちなみに俺が心配しているのは自分の姉の千冬姉ではなくてむしろブラックスターの方に対してだった。

なぜならば、わがお姉さまこと、千冬姉は、ISの最強の操縦者を決める大会『モンド・グロッソ』で初代王者としてブリュンヒルデの名を手にして以来世界最強の名をほしいままにしている存在で、今現時点進行形で戦闘を仕掛けちゃいけない生き物ランキングで、二位に多大なる差をつけ堂々の第一位となっている。以上 織斑一夏調べ。

と言う存在である。ちなみに二位は、箒な、あいつ一回怒ると手がつけられなく無くなるんだよね。

うん、まあ、この事はいいや。

兎にも角にも、俺が何を言いたいのかと言うと、『ブラックスター死なないよね!』という事である。

「いっ——!?!」

頭を何かで、叩かれた痛みに俺は、恐る恐る振り向く。

するとそこには、漆黒に輝く出席簿を構えた千冬姉がいた。

その目は、失礼な事を考えるな。とも、次はないと思えともいつているようだった。

「山田先生」

「——はいっ」

「こちらは気にせずに進めておいてくれてかまわないので、後の事はよろしくお願いします」

「はい、解りました。」

こう見えても副担任ですから。と山田先生が返すのを確かめ、己はブラックスターと共に教室を後にする千冬姉なのであった。

「じゃっ、じゃあ続きますよ。えっと次は、織斑君ですね」

はい、お願いします。とその頭を下げてきていたので俺はとっさに、

「は、はい解りました」

と答えてしまった。だが一度引き受けたものは取り消す事は出来ない、これが男の性というものなのか……。

何でこんな事を考えているのかって？

そりゃあ、決まってますよ。

さっきの事で自己紹介何も考えてなかったからです。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

ひとまずの固定文を言ってみたんだが。——ってなんですかこの空気『もっと他にはないの？』的な視線。そして、山田先生からの『まだ何かあるんですよね？』てきな雰囲気。

一体なんて言ったら正解なんですか！？　こちらとら、小中一貫学校だったから自己紹介なんて経験皆無なのに……。

(助けてくれエエエエー!!！)

そういう意志をもった視線を箒に送ったんだが、その視線は、無常にも外に向いていて、何か考え事をしている様だった。神は俺を見放したのかっ!？

「……………」

そして、また教室は沈黙に染まってしまった。

(どうにかしてこの空気を換えなければ……………背に腹は変えられん!!　かくなる上はっ!!！)

そう覚悟したのだが。

「何あの子、千冬様と殺りあってるなんて……」

俺が、自爆覚悟で決心した行動は、窓側に当たる一人の眩きに救われるのであった。

「あ、さっきのブラックスターって子だ!!」

「ほんとだ、ぶらっくくすごいんだね」

どうやら、あの二人は校庭にて戦闘をしてるらしい。

「皆さん座って下さいよ。 こっちは、織斑先生に頼まれて………
…って、なんですか、あつ、これは、凄いですね」

どうやら、山田先生も、反論することから観る事に決めたらしい。

そしてそれをきっかけにしたのか、クラスの全員は一瞬にして窓側に集中して人ばかりになっていた。

（た、助かった）

俺は、ほんと胸をなでおろすとその人ばかりに加わった。

【第貳話】

二人は、校庭で対峙してお互いに激しい攻防を繰り返していた。

「おい、お前、ブラックスターと言ったか。なぜ武器えものを使わない？」

千冬はそう言いながら先ほど突き出した右手を戻しそれを返す反動を利用し鋭い回し蹴りを放つ。

「そんなの決まってるだろ。常に相手と同じ土俵で戦う。これが俺のルールだからだ」

ブラックスターは、千冬が放った回し蹴りを後ろに少しそれる事によって難なく回避。

そこから、左のジャブからの右の魂威こんいを放つ。

千冬も、常人だったらおそらく避けられないであろうそのコンボを難なく避ける。

それを見たブラックスターは己の目に狂いはなかった。と感じていた。

「ふむ、何か奇妙な技を使いようだな。…………まあ、いいだろう。
ところで今から私が武器えものを使えば、お前も使えるんだろ？」

「ああ、そうだ」

初めからそう言ってるじゃないか、と思ったのだがここはあえて
冷静になれ、と自分に言い聞かす。

しかし、このねーちゃん想像以上に強い。今少し手合わせをし
ただけでも博士と同等、いやそれ以上ぐらいだという事が嫌でもわ
かるぜ。

しかも、初めてみた魂威こんいを一発で見極めて避けてたな。

こりゃあ、もしかして本気出しても良いかもな、うん。

「これでいいか？」

「なっ———!？」

只今、千冬の手にもたれていたのは、なんか見覚えがある黒い板
だった。

言わなくても解ると思うのだが、アレは、戦闘用ではない、あく
まで点呼用だ。

「ちょ、おい、ふざけてんじゃ」「ふざけてはいない」ああ!？」

「良いから。お前も武器^{エモノ}を構えろ」

「————ちっ」

畜生!! 俺を馬鹿にしやがって。

まあ、そりゃあ頭の方は、自分でも分かるほどダメなのは分かってるんだが………人に言われるとなんかね、スツツツツゲエエエエエ ムカツク!!

「後悔させてやる!!」

(椿。 モード忍者刀だ)

すると腰のつけていた二つの鈴(椿・待機Ver.)が光り輝き俺の右手に小振りの刀が姿を見せた。

久しぶりだな、この状態の椿を使うのは。

まあ、本気といっても『訓練』としての本気だしいきなり影☆星を使うのは少々気が引ける。

なぜ気が引けるのかって言うと、あれ（影☆星）は戦うための武器ではなくあくまで相手殺すための武器と言う風に俺の中で線引きしてるからな。

まあ、相手がISつつう装備をしてたら別だけど……。

「そうか、それがお前の武器^{エモノ}か」

「ああ、そうだ、そしてもう俺は手加減しねえ」

なぜなら

「今から俺様のオン・ステージの始まりだからだっ！！」

俺は、只今ひゃっはーと言わんばかりに叫んだ。

久しぶりにやってみたけど、やっぱこれ叫ぶと気持ち良いぜ！！

「今から俺様のオン・ステージの始まりだっつー!!」

と目の前では、小振りの刀（おそらく忍者等の類だろう）を構えて叫んでいるブラックスターがいる。と言ったよく分からない状況が展開されていた。

「なんなんだ、こいつは……………」

つついそう叫んでしまったのだが本当のところそんなことをそんな事を言ってる場合ではなかったかと思いとどまる。

なぜなら今私の右手には教師バージョンの時に常時装備しているいつもの黒い出席簿のみが存在していた。

（勢いだからと言っても、これは…………）

一方、ブラックスターの武器は、大体刃渡り三十ほどの小刀……。

これは、圧倒的に分が悪いな（装備的に）

「まあ、良い。掛かって来い!!」

しかし、まあ、受け流すだけなら何とかなるだろうな。

「応っ!!」

私は、さっきより速く鋭く迫ってくる少年を視界に入れて、出席簿を改めて構えふと思うた。

こいつは、朝のアレの件くだりなんだろうな、多分。

【第弐話】（後書き）

更新スピードは、遅いです。

以上

【第参話】回想？－？（前書き）

遅れてすんません…

そこんとこすいませんでしたあ！！！！

今回は、まあ、回想です。

しかも文字数1000行ってねえ！！

【第参話】回想？―？

――時刻は早朝四時、今だ太陽が顔を見せないころ

私は、いつものフィールドワークを終え、食堂に来ていた。

「ふむ、今日もこいつにしよう」

私は、その指でステーキ定食を選択していた。

「………頼む」

「はいよ、千冬ちゃん、今日も早いねえ」

食券を出し食堂のおばちゃんに作って貰う。

この時間帯で、下ごしらえをしてる貴方の方が早いと思うのだが……。

「千冬ちゃん、出来たわよ」

どうやら出来上がったらしい。

この時間帯はいつも私しかないのと、毎回のようにこれ（ステ

ステーキ定食）を頼むので準備を済ませていたのだろう。
証拠に、ステーキ定食は頼んでから三十秒もしないうちに出てきた。

もちろん旨そうに湯気をあげている。

「ありがとうございます」

私は、その気遣いと作ってくれた事に感謝して受け取る。
それからいつもの指定席である一番近い席に座る。

その場には、肉をナイフで切る音と、おばちゃんの料理をする音のみが響いていた。

「ふむ、やはり旨いな」

おばちゃんの料理は絶品だ！！

出来上がったばかりのステーキは、定食という幅を優に越えている厚さだった。

中にナイフを通してみると中から仕込んでるのでは無いか？と思えるほどの肉汁が盛大に出ていた。

ああ、なんともいえない味だ……、しかもちょうど私が食べたかったミディアムに仕上がっている、どんどん食欲が湧きたてられる……。

「旨いっっっっっ!!」

そう叫び、いつかおばちゃんに料理を教えて貰おうと、ひたむきに思う千冬だった。

「ふゝ、食った、食った」

そんな、らしからぬ事を呟きながら、部屋に向かっている途中だった。

――――ピリリリリ――――

突然私のポケットから電子音が鳴っている。

こんな朝早くにかけるなんて、何か緊急事態が発生したのか？

私は、ひとまずそのディスプレイを見た。

「……………誰だ？」

そこには、『四二一四二一五六四』と言う見覚えのない番号だっ

た。

ふむ、間違い電話かもしれないな。

そう思い。そのまま見た事のない番号を見つめていた。

というか、留守電にしてなかった気がするんだが……………。

案の定そうだったので渋々出る事にした。

「……………もしもし、どちら様ですか」

「うすっ、う~~~~~~~~す♪ 死神様で〜す」

【第参話】 回想？－？（後書き）

死神さん出てきましたねーww

文字の間隔とかどうでしょうか？

一応考えてみたのですが……

駄目だったら指摘してください。

次回は、来週に書き込めるつもりです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1795y/>

★ストラトス

2011年11月13日16時06分発行